

日本女性学会 2023年度少額研究活動支援 報告用紙

提出期限 6月30日

提出年月日 2024年9月26日

名前	井上瞳
所属・立場	日本学術振興会特別研究員 PD (広島大学人間社会科学研究科)
支給を受けた研究活動	性暴力被害者支援に関する医療人類学的研究
研究活動の実施状況	<p>本研究では、性暴力被害者支援に関する英語圏の医療人類学的研究の変遷を明らかにすることを試みた。英語圏の議論に関して、日本では、精神医学・心理学的領域が中心となり受容をすすめる一方で、医療人類学をはじめ、社会学・哲学・心理学といった人文社会科学領域の議論はほとんど紹介されてこなかった。</p> <p>文献調査の結果、以下の3点が明らかになった。</p> <p>①性暴力被害者支援に関する英語圏の医療人類学領域の研究は、主にフェミニズムの観点から試みられている。</p> <p>②「ジェンダーに基づく暴力 (<i>Gender-Based Violence</i>)」を生み出す権力構造やヒエラルキーを強化するのではなく、いかに脱構築するかという観点から方法論が模索されている。</p> <p>③方法論の観点からもフェミニズムが極めて重要な役割を担っている。</p> <p>これら英語圏の研究において、「フェミニズム」は社会運動という意味に限定されない。フェミニズムは「批判的=脱構築」なアプローチとして、医療人類学をはじめとして、社会学、医療社会学、社会心理学、心理学、哲学、現象学など異なる分野を横断していること明らかとなった。</p> <p>このように、フェミニズムを各分野がそれぞれのスケールを維持しながら、同時に性暴力という主題をめぐり議論の接続を可能にする蝶番として捉えた場合、日本での応用可能性も見出されうる。批判的であることは対立や没交渉に縮減されない。日本ではこれまで性暴力とケアに関する議論は臨床家を中心に担われ、それ以外の領域での試みは未だ多くない。しかし、上述したように、様々な分野が各自の水準において立論することは、それ自体が既存の議論を更新し拡張する身振りとなる。この点に着目した場合、同じ水準に属さないということは必ずしも否定的な契機ではなく、むしろ議論を深化しつつ展開する肯定的な契機となりうる。</p> <p>本研究では、医療人類学を起点に多岐にわたる文献調査を行った。これを通して、日本で新たな議論の端緒をひらく可能性が示された。</p>
幹事会使用欄	